

## ■■■ 折柴の塚 ■■■

### 折柴

おりしば

折柴とは柴立の謂である。三河遠江の山地、ことに天竜川を挟んだ村々に多く行われており、かつそう呼んでいる。別に花立てとも、花供養とも言っているようだ。いまさら事新しく書くこともないのであるが、だんだん跡を絶ってゆく風習でもあるので、実見したものだけ、目録体にならべてみる。そのついでにそれに絡んだ話も、邪魔にならぬ程度で書き添えておく。

天竜下りをした人は知っているのであるが、船が三遠の国境にかかって、兩岸に聳え立った峻峰を縫うて、三、四里ほども下ったと思う時分、珍しく対岸の山腹に一叢の家並みを

やんぼろ

見るが、ここが前にも言った山室という部落である。ここから峠へ登って、周知郡の芋掘りへ越える名ばかりの路がある。その峠を少し降った所の辻に、小さな祠があつて、これにたくさんの折柴が供えてあつた。祠を土地の人は子育て蔵と呼んでいるが、折柴の葉影から覗いているのは、右手に小児を抱え、左手に蓮華を捧げた、豊艶な表情の観音の石像である。私が見たのは、今年（昭和二年）の五月十四日で、あたかも新緑の頃だったので、供えた柴も大方萎れていた。石像には年号等もなく、ただ白石山の三字が刻んであるだけに、なにか由来譚でもないものかと、麓へ下ってから、いろいろ訊ねてみたがわからなかった。

三河路の方にはそちこちにある。最初に見たのは今年の正月で、振草村の古戸から、足込へ越える方地峠の途中である。峠からまだ五、六町手前で、杉木立の中から出て来た路が、急に見晴らしのよい丘陵で彎曲する位置であつた。黄色い芝草をかぶった名ばかりの塚の上に、一叢の折柴が薄日の中に浮び出ているのがなつかしかった。ふり返ると、脚下に古戸の村が展けて、「山島民譚集」の序文の、行く方もはるばる見ゆる横山の路の阪戸の歌が想い出される。こんな折柴の塚は、永く遺しておきたいものである。塚の上には高さ一尺二、三寸の石地藏があり、それを囲んだ折柴は、まだ挿して間もない。赤芽や

あせぼ

馬酔木の小枝が多かつた。中には松や檜の葉も見えたが、特に赤芽と馬酔木が目立つたのは、あたかもその傍らに、それらの枝が多かつたため、この二つをわざわざ選んだのではなかつた。折柴の柴は選ぶならば、花の木がよいと言っている。誰がするともなく、古くなつたものは取り捨てると見えて、傍らにたくさん古いのが積んであつた。石地藏の後に、別に一基長方形の自然石が立っていたが、これは以前からあるもので、明治十幾年と

かに、石像を新しく建立したのである。この塚は山伏の女房の、行き倒れていたのを埋めたとかで、あまり古いことではないそうである。

おおたて

同じ郡の豊根村字大立から、富山村へ越える霧石峠の頂上にも、折柴をした祠がある。大立から坂を登りつくして頂上へ出ると、そこに杉と栢の大木が並んで立っていて、路はその根元を囲って通じている。栢の方は風折して倒れたままになっているが、根元に地藏だか庚申だか、わけのわからぬ石像が五つ六つならんでいて、その中の一つが、特に木の祠に納まって、折柴はそれにだけ供えてあった。同行の富山郵便局の逡送人に訊ねたが、ただ「もうれい塔」だと答えただけで、他に由来も何も聴くことは出来なかった。これも今年の一月二五日で、ひどい大雪のした後であった。

たびたび言う園村字大入へ行く途中の、遠江の浦川から登った峠にも、石地藏が立って折柴をした所がある。坂をすっかり登りきって、峪を隔てて大入の人家を望む地点であった。ここのは柴の数も少なく、このふんでは立てるものも次第に跡を絶ちそうに思われた。これも「もうれい塔」であるのか、山伏の墓と言っている。

振草村平山の、堤石の峠の途中に、自然石に南無阿弥陀仏の文字を刻んだ碑があるが、これも山伏の行倒れを埋めたものと言っている。これには折柴のことがなかったから、少し筋違いではあるが、実は他の場所の例から、あってもよさそうに思われるものである。しかもこれは、この峠で人に憑くという、「だり神」と縁がありそうである。

## みさき

それで前にも言った「もうれい塔」であるが、この地方の村々には、幾カ所も祀ってある。豊根村の下黒川には、字小造と中久名との中間道路脇に、巨大な自然石に亡霊塔と刻んであった。十数年前、前を流れる大入川氾濫のおりに押し流されたとかで、今あるのはその後建てたものと言う。その他、前に言った古戸と足込の境の方地峠にも、古戸の隣村の粟代にもあった。この辺で「もうれい」と言う一方、「みさき」と一般に呼んでいるのは、山川などで不慮の死を遂げた者の霊の謂れであった。それで「みさき送り」と称する行事が、どこの村にもある。新たに変死者があった場合は、後に日を定めてそれを行ったのである。「みさき」が後に残ることを怖れるという。夜間法印が主としてことに当たって、村人は松明を灯し、ときには鉦太鼓で、多く山の峠などへ送り出した。そうした一方変事のあった場所へは、誰ともなく石を置いたり、折柴を供えるという。それで、そうした場所近くで働いたりして、体の工合でも悪くすると、やはり「だり神」に憑かれたというそうである。

川で死んだ場合はそうでもないが、山で不詳のことなどあった跡は、「くせやま」または「としばた」と名付けて、焼畑の作業を起こしたり新たに斧を入れることを嫌った。それで「くせやま」となり「としばた」となった所は、個人が所有していても始末に困るところから寺へ寄進するのが多かった。「あげやま」と言うのは、寺へあげるからだなどと言う。構わず手を入れたりすれば、必ず過ちをしたり、病気に罹ったそうである。また豊根村の曾川には、「犬としばた」と呼ぶ所があった。持主も処置に困っているというが、これはある年ここで山作りをしていたものの女房が、蓼を煮出した湯を、不用意に小屋の外へ捨てたところ、あたかもその下のかて（山畑の土除けに横たえた木）の下に眠っていた犬に、その湯がかかって死んだため、それ以来言い出したものという。

「くせやま」または「としばた」の名は、遠江の磐田、周知の奥でも通用するが、この地方では別に、「ばち」または「ばちやま」とも呼んでいる。持山に「ばち」がひどくて、弱ってしまうなどと言うのを聞いた。「ばち」山ではもう何の役にも立たぬのである。

## 池の明神

これまで言った折柴は、山伏あるいは「もうれい」供養の気持かららしいが、別に池の神に折柴をする風がある。三河の振草地方から信州へかけて、お池様または池の大明神と称する神がたくさんある。現在池になっているものはもちろん、かつて池だった跡にも祀ってある。私が今知っているのでは、北設楽郡三輪村字池場のお池、前言った大入の池の大明神、豊根村字曾川のお池、同村字小田から間袋へ越す途中にあるお池、ここから山一つ隔てた浅草から大立への途中のお池、信州境の牧の島の池の大明神、さらに信州路に入っ  
まふくろ  
ては、大川内を初め下伊那郡旦開村栃洞〔現、阿南町〕のお池、同じく新野の池の大明神などである。このうち現在折柴を供えているのは、三カ所だけである。

やしろざか  
豊根村字小田から間袋へ越す途中の社坂にある池は、道路から山一つ越えた窪地にある。それで峠の路傍に折柴の塚があって、そこに捧げるようになっている。浅草から大立へ越す途中のものは、あたかも路が池の畔を通るので、路傍へ池に向かって立ててゆく。したがって折柴が路に沿って並んでいる。この二つの池は、すでに干潟になっていて、雨でもない限り水はない。今一つの曾川の池は、曾川と田鹿の村の間である大入川の河畔にあって、現今も透明な水を湛え、古木が水面に覆いかかって、物凄い池である。ここも道路が池畔に沿って通じていたので、数年前までは、みごとに折柴がならんでいたと聞いたが、私が行った時は、道路が改正されたために、話のような光景は見られなかった。現在の道路は、以前の位置よりはるかに上手を通っているのである。しかし一カ所ちょうど

池を望む地点に遙拝所式の、小さな堂が建てられて、そこにたくさんの折柴がしてあった。

土地の人たちの話では、池の神は大蛇とっていて、いろいろの譚があるようだ。そんなわけで、信仰も旺んなものである。。その一例として、余計なことだが話が珍しいからつけ加える。もう十幾年も前になるそうであるが、下黒川のなにがし、年は二七、八であったという。軍隊から帰ったためか、とかく土地のものとは意見が異なっていたが、あるとき隣村田鹿の村に何かの日待があつて招かれて行った。途中池の畔を通りかかった時、池を信仰する人々の迷芒を罵って、はては池に供えた折柴をことごとく抜き取り、それに小便をかけて立ち去った。その夜他の連中は日待のあつた家へ泊るというのを、自分だけは一人帰ると言い張って、雨のそぼ降る中を提灯を持って出かけたそうである。翌朝になって泊った連中が池の傍らまで帰って来ると、その男が路下に迂り込んで、水際の岩に足を挟まれたまま、真白な顔をしてほとんど息が絶えかけていたそうである。すぐに援け起こして見ると、格別怪我はなかったが、間もなく息切れてしまったという。後での想像談であるが、高言を吐いたものの、池の傍らまで来ると、昼間の仕業もあり、にわかには怖ろしくなつて、過つて足を踏み迂らし岸の岩に足を挟まれたのを、下から引っ張られるようにも思い込んで、極度の恐怖に喪心したものだろうと言つた。なんでもわずかのことで、まだ水面には足が届いていなかったそうである。

花祭りの行事なども、この池の明神すなわち池を祀る信仰が下積みになっていたようである。